



子どもの友達フレイベル

山本礼子

恩物にかたどって作られた記念塔は、一八三七年八月一日付の日記に書かれていた「いざや、われらが子たちに生きようではないか」(Kommt, lasst uns unsern Kindern leben)のごとびが刻まれ、晩年のフレイベルが全精神を打ち込んだ幼稚園および保母養成所のみかくの小高い高原にあります。かつて、ここを訪れた倉橋惣三氏は、この記念塔の前に立って、しばし、はてしない追憶に耽ります。氏はフレイベルの学説を学び、それを批判し、しかし彼の人柄にいいしれぬ憧憬を抱いていた一人の先達であったといえましよう。氏はその足でシュワイナにあるフレイベルの墓に

詣で、馬車に同乗している女兒に「フレイベルってどんな人なの」と聞くと、その子は即座に「子どものお友達」と答えてくれたことに感激します。偉人とか、大教育者とは言わず、子ども達の仲間と表現されるすばらしさに動かされるのです。ばかおやじといわれながら子どもと共に過し、子どもと共に遊びたわむれる翁を想像します。それは子どもと打興じた良寛にも似た情景といえましよう。

(一)

一七八二年四月二十一日、ドイツ、チューリンゲンで出生した

フリーベルは、生後わずか九ヶ月で実母と死別します。父は牧師であり、非常に多忙な業務に追われますが、「田舎牧師の身分としては確かに稀に見る教育ある人であり、否な学者でもあれば経験家でもあり、倦むことを知らない活動家」であつたと息子フリーベルは自伝の中で評価しています。そのため父と共に過す時間が制約され、父に親しみの感情を持ちえず、「幼時から私は苦痛や圧迫のひどく多い人生闘争の洗礼を受け、そして不自然な生活と欠点の多い教育」とが彼の精神生活に多くの影響を与えたのでした。四歳の時、父が再婚し二度目の母を迎えますがやがて二人の間に溝ができ、心の交流がさざぎられてしまいます。この間の事情については長田新訳『フリーベル自伝』に詳細に記されてありますが、この自伝をもう一度ひもとくとき直す時、その文脈の間から、父ヨハン・ヤコブ・フリーベルからの影響は少なからずあつたというより、かなり強い影響があり彼の精神構造の構築の基礎をなしたと断定せざるをえないように思われます。彼の冥想と反省、彼の内的生活の発展と完成に大きく寄与しているといえますし。

「朝な夕な家族の全員が集つた。日曜日にさえ集つた」と記しています。日曜の聖日礼拝の前に旧ルター派の牧師であつた父は家族全員召集し、家庭礼拝を重んじたその荘厳な時間に、フリーベ

ルは自己を内的生命に導き込み、彼の心情生活を鼓舞し発展させ、かつ向上させて行くのでした。村立女子小学校の入学、この学校の選択にも父が大きく関与しています。教師の資質、学校の秩序など父の懐いていた予想と合致したため、規則を破つて女子の小学校に入学しました。そこでの生活は彼の内面性に全く一致していたと述懐しています。入学した第一週に暗記するために決められた聖句から深い印象をうけ、彼の心の琴線にふれるのでした。それはマタイによる福音書六章三三節の

「汝先づ神の国と神の義を求めよ」

というみことばでした。わずか七歳の少年の心をとらえたこの聖句は決して理解しやすいものではありません。しかしキリスト教の本質に迫るものであり、彼の地上での生活は、神の国を求めて歩みつづけた生涯であつたといえます。彼は正統派神学の立場に立つ父の説教を注意深く聞き、それに固執し、そこに「含蓄されている内部生命をその外殻から取り出す」のに懸命になるのでした。自伝にあるように「おそらく既にその時単純な少年の心情は此等の語句から彼らの生命の基礎と救済とを感じ理解し、否な、更に奮闘努力するこの大人に取つて不拔の勇氣と不撓の犠牲の精神とそして犠牲を喜ぶ精神との源泉ともなつた信念を感得」したのでありましよう。十歳の時、母方の伯父の許での新生活がはじ

まりますが、その伯父が「お前は既にお前の父からいとも優れた教授をうけてたから」と評価しながら語りかけています。その地で通学した市立学校での宗教々授にも大きな魅力を感じます。

「特にイエスの生涯や事業や性格が述べられる時には私は屢々内面的にほんとうに溶かされたのである。その時はさめざめと泣き、何時かは私もこれに似た生活を送ることが出来るといふ、いとも確乎とした憧憬が私の心に充ち満ちた。」このように心の遍歴を叙述する彼ではありませんが、「私は私自身をも知らなければまた私の最も本来的の生命をも知らず、私の目標をも知らなければまた私の本来の人生行路をも知らなかった。」のでした。

奇しくも

「君は人間に食物を与へよ

人間に人間自身を与へることこそ

私の努力であつて欲しい」

と記念帳に書き留めさせたのは、何の働きであつたのでしょうか。必ずしも恵まれた環境の中で生育した彼ではありませんでした。魂の遍歴はそれ以上に苦渋にみちたものだったといえましょう。「飽くまでも有能な人間の完成は比較的生涯の遅い時代に来ることが稀ではない」ということばに支えられつつ、自己の全生活を賭けるべき仕事、活動を模索するのです。

彼の生きざまをここで詳細にふれて行くいとまはありません

が、これまで述べて来たようにキリスト教精神の真髓の発露が、フランクフルトでの教師生活体験を「彼は水中の魚・空飛ぶ鳥のやうに幸福だ」と語りしめたのだと思います。そして、さらに彼がもつとも信頼していた兄が病死し、依頼をうけた遺児三人の教育のため「すべてをみすてて、すべてを犠牲にして人間へ、人間教育へ帰って行く」のでした。他の従兄弟二人を加えて五人の子どもを対象にグリースハイムの「一般ドイツ教育所」で待望の教育活動に着手、フレイベル三十四歳。偶然の出来事が二度目の教育生活へと、そして終生その世界に生きたのでした。

(二)

その後の教育体験を通して、フレイベルは特に幼児教育の意味と価値を痛感します。そうした彼の活動の焦点は幼児教育にあてられ、遊具を作ること、保母の教育にしても、あるいは母性教育も、ひたすら幼な子の魂の醇化・育成のためであり、純粋な人間の高みへと向上させるためのものでした。ここでは、彼を特色づける遊具について考えてみてみましょう。

「精神が自己表現によって自覚するには材料を必要とする。精神は材料をとおしてのみ自己を表現することができ、また材料に加工することよつてのみ発展することができるからである。したがつて幼児教育には形成させるための適当な材料をあたえなければ

ばならない。」と考へ、まず幼児に適當な遊具を与えねばならないと考へ、必要な遊具の考案と製作にとりかかります。かれの考案した遊具がかの有名な恩物 (Gabe) と呼ばれているものです。私共は、幼児の自己活動、創造活動のために欠くことのできない道具を作らうとするその姿勢と着眼点に敬服します。自然界の中にあるすべての形や性質や法則を象徴している遊具、子どもの象徴性を刺激するような遊具を考案します。それは日常性をもちながら、子どもの夢を發展させ、子どもの創造力を養成します。シンブルな形の中に子どもの夢がはぐくまれます。それにつけても近頃の子どもの玩具に問題を感じます。多くの玩具は複雑な構造をもち、高価なものになっています。子どもに夢を与えるのではなく、夢を奪ってしまうようなものも多々あります。今日、フレール（Freiluftspiel）の恩物が遊具として絶對的なものとして評価する人はいません。しかし、フレールが恩物を考案し製作した時のその底流にあった思想・願望に想いを馳せたいと思うのです。荏苒雅子氏が指摘するように、フレールの恩物をもつ二つの目標は「第一に恩物をおして自然を理解させるということ。第二に恩物によって子どもの創造力を陶冶するということ」にありました。子どもは子どもの生活空間に働きかけ、そこにあるものから何かを探し求めようとする衝動的な行動をつねにとっています。小石も木片

も子どもにとっては格好な遊び道具です。そこに着眼して「森羅万象のなかでもっとも単一な基本的な形態しかもその中に多様性を含んでいるボールをもって第一恩物としました。その他、立方体や直方体、またそれらの組み合わせなどの恩物はそれぞれに単純な基本的な形態のものです。彼がそれらの遊具を恩物 (Gabe) と名付け、神からの賜物と位置づけ、神の似姿に作られた幼な子をして、与えられた能力が充分に發揮できるようにそれらを活用しようとししました。

さきにふれましたように、彼の幼児教育の対象は、幼児であり、その幼児たちが使用する遊具でありました。と同時に教師教育・母親教育さらに家庭教育にまで敷衍します。「みつけた、その名は幼稚園でなければならぬ」(Ich hab's gefunden, Kindergarten soll seine Name sein) うらかな日の光に照り映える行手の美しい大きな花園のような場所を見て叫びました。これが今日の幼稚園という名称のはじまりですが、それは狭く囲まれた幼児の園ではなく、彼が夢みてきた幼な子のための楽園でした。

「まず、神の国を求めよ」との聖句にうながされて、地上に幼な子のための神の国の到来を待望した、そしてその実現のために種々の誤解や弾圧と戦った幼な子の友フレールの姿が彷彿と浮んでまいります。